



岡田理子「秋の実り」F10（水彩）

作者コメント

瓢箪とカボチャの立体感を主眼に描きました。作品全体から秋らしさを出したかったのですが、もう少し秋の温度感や匂いなどを出せたらよかったです。

喜田コメント

岡田さん、今月も良い作品を描いていただきました。かぼちゃ・ひょうたん・クリなど秋の恵みが勢ぞろいですね。

構図的には一見、秋の野菜や果物を無造作に画面上にばらばらに散らせたように見えます。絵画を描くうえで「主役と脇役が明快にキャスティングされていること」が重要ですが、この作品の場合、かぼちゃと瓢箪が中央に鎮座していて、大いに自己主張しているのが、主役であることが明白。一方、クリや玉ねぎなどは主役を助ける脇役として、上手に紙面全体の調子を整える役割を果たしています。このように主役と脇役が明快に区分されていて問題ありません。

次に色彩を見てみましょう。あまり目立ちませんが、色彩的に数種の落ち着いた秋の色が配置され、快く響き合っています。とても控えめで好感が持てます。

野菜や果物のサイズ・配置・色から、まるで「秋のセレナーデ」が聴こえてくるように心地よさを与えてくれます。一つだけ、欲を言えば、かぼちゃと瓢箪のどこかに、秋の盛りを伝える「強いオレンジ、紫」などの色を少し配置してほしいところです。



月川りき江「カキ養殖業の人」150mmx180mm（ちぎり絵）

作者コメント

エッセイ教室の西原先生の著書「海は憎まず」の裏表紙の写真を、先生のお許しをいただいて、ちぎり絵にしました。西原先生にメールで、お願いしましたら、「月川さん、頑張っていますね。応援します。私の著書関係ならどうぞ、お使いください」と、すぐにお返事を頂きました。出来上がった作品を先生に送りましたら、今日、先生から「3・11の大震災のあとの漁師たちの生きる姿が、リアルに伝わってきます。月川さんの作品はととても素敵ですね。あなたの才能に驚きました。」という感想文が届きました。嬉しい気持ちになりました。私は人物が苦手なので、働く男性の力強い姿が表現できるか案じられましたが、何とか出来たようです。

喜田コメント

タイトルにあるように「労働する漁師」の動きやバランスがとても上手に表現されています。対岸の山々に4種類の色彩を組み合わせ、また、手前から対岸までの波立つ海原の表現、特に手前の海面と遠方の海面の表情の変化など本当にうまいと思いました。この作品には「ちぎり絵」の柔らかさ、面白さと、「切り絵」の鋭利さ、メリハリが混在しています。ボートや船、人物などの細かい部分は「ちぎり絵」では限界があり、「切り絵」的手法を使っても良いと思います。月川さんが「ちぎり絵・切り絵 mix」という新しいジャンルを開発しても、良いのではないかと思います。



武智康子「コスモスの花」F4（水彩）

作者コメント

散歩の途中、ある家の門前にプランターに植えられたコスモスを見つけました。とてもきれいだったので、写真を撮って、帰宅後すぐに描きました。コスモスは、難しいですね。背景に工夫をしてみました。コスモスの柔らかさは、少し出たかなと思います。

喜田コメント

コスモスは可憐な乙女のような花です。その特徴は「花びら」と「針状の葉」にあります。この作品はその両方ともよく描けていると思います。作者コメントにも書かれていますが、背景の変化がとても面白いと思いました。敢えて、中心の花の部分の背景を濃いマリンブルーに重ねて花弁の白を浮き立たせ、下方の茎・葉っぱの背景を同系色のグリーンに重ねたところは、ある意味でチャレンジだったのではないのでしょうか。背景のグラデーションと境界線の変化の面白さがこの作品の魅力の一つになりました。コスモスの花芯はどのようになっていますか？ そこも注意深く観察してみてください。



黒田重雄 「蓼科～ガーデンショップにて～」 F6（水彩）

作者コメント

茅野にあるバラクライングリッシュガーデンのショップ。窓を囲む緑に趣があり、印象的でした。窓越しの室内の描写と葉の緑の描き分けが難しくて、私にとって大いなるチャレンジでした。右下のレンガの色がアクセントになりました。

喜田コメント

難しいモチーフです。しばしばこのような魅力的な情景に遭遇して、描きたいと思っても、難しすぎてチャレンジしないという経験があります。黒田さんは果敢にも挑戦しました。勇気があります。ある程度描き上げる自信がないと、なかなか着手し難いモチーフです。構図的にはとてもユニークです。窓の周りはずべてガーデンの緑と花、手前下に斜めにレンガのテラス。木々の葉も咲き誇る赤い花々も克明によく描かれています。最大の主題であるガラス越しに見たショップの室内の情景の描写が足りません。室内は外の世界と違って電気の柔らかい明りが灯り、店員もいるはずで。このような、室内独特の特徴的なものを描き加えると良いと思います。レンガのテラスが作品を締めるのに役立ちました。



竹前義博「青山一丁目交差点」F6（水彩）

作者コメント

左は赤坂御所の石垣です。御所の周りを一周できるのですが、信号もなく、適度な坂道もあり、快適なウォーキングルートです。この絵を描いた9月の終わりでも暑い日が続き、ランニング姿で走っている人もいます。9月終りの樹々の色はまだまだ夏の熱気を残した濃い緑が中心ですが、間もなくやってくる秋の気配が感じられ、木々に秋の色を描き加えました。

喜田コメント

竹前さんの「田舎の風景」も素敵ですが、大都会の中心地である「赤坂付近の風景」も面白いと思います。今回は「青山一丁目交差点」付近、東京のご真ん中です。この場所は「青山通り」と「環状三号線」の交差点であり、真っ直ぐ進むとメトロ「赤坂見附」駅に至ります。近くには赤坂御所・青山墓地（青山公園）・高橋是清翁記念公園など緑豊かな名所が多数あります。さて、この作品ですが、都心の緑と大都会のビル群をモチーフとしています。遠近法によって道路の大きな枠組みが構成され、無機質なビル群と豊かな緑の絡み合いが面白く描かれました。道ゆく人、道路を疾走する自動車が都会の風景画を味付けしています。一番面白いのが「御所の石垣から突き出た大木の緑・道路沿いに植えられた灌木とガードレール・右から中央に至る街路樹のみどり、が作る造形」です。無機質のビルの直線性にアールヌーボーの緑の腕が絡んだような曲線性がとても面白いです。改善点は、緑が単調すぎです。もう少し工夫して多様な緑を使う事、来るべき秋の色彩を刷り込むこと、などです。



若林哲史「白い曼殊沙華みつけた」 F4（水彩）

作者コメント

彼岸花は毒々しい(?)までの「赤」しか知りませんでした。ところが、家内に拠ると関西では赤以外に白の彼岸花もみかけるとのことです。そこで、赤に加えて白い曼殊沙華を追加してみました。そして、構図的には切り花ではなく「自生の体」に描きました。ガッシュの白では透明感が不足で失敗でした。機会があれば、マスキング液を確り使って再トライしてみます。

喜田コメント

作者はガッシュで描いた「白」が失敗とっていますが、私は結構うまくいったのではないかと思います。「赤」の曼殊沙華に被るように描かれた「白」の曼殊沙華、とても難しいモチーフですが、丁寧に確実に表現できたのではないのでしょうか？ 先端が鳥の爪のように湾曲した一弁一弁の花弁と、長く伸びた花芯の描きかたも見事です。また、手前の花弁は濃く、先の花弁は淡く、描いた写実力も大したものですね。花瓶に挿した切り花でなく「自生の体」も上手くいきましたね。特に修正するところはありませんが、敢えて言えば「茎を1本くらいクロスさせてもよい」



遠矢慶子「好きな時間」 F6 (水彩)

作者コメント

私が大好きな、50年使っている大倉の紅茶セット。散歩で採ってきた紫陽花と蔦をあしらいました。紫陽花はすっかり枯れて色が変わりました。それに林檎とキンカンです。いつも散歩で花泥棒しています。構図的には林檎がすこし大きすぎたようです。

喜田コメント

しっとりと落ち着いた素敵な作品です。遠矢さんにとって久しぶりの水彩画ですね。パステル画ばかり描いていたので、水彩画の中に優しいパステルの味わいがミックスされていて、とてもよい作品になったと思います。この作品の主体はタイトルから、紅茶セットですが、ガラスの花瓶に「近所で失敬した紫陽花と蔦と赤い花」が投げ入れた感じに活けられた花がとても魅力的に表現されています。この「花」の描写が素晴らしいと思います。一方、遠矢さんが大事に何年も使い込んだ「大倉の紅茶セット(ポット・紅茶茶碗・黄色い紅茶の缶)」が左サイドに描かれています。花瓶や紅茶セットや林檎、キンカンの配置がとてもリズムカルです。まるで音楽が聴こえてくるようです。以下に感じることを列記します。
①林檎はなくてもいいかと思います。②花と紅茶セットを繋ぐものとして物でなくてマチエル(筆あと)で工夫したらいかがでしょうか。③花瓶や紅茶セットが置かれているテーブルを描かなくても良いのですが、影として描いた薄墨色をもう少し濃く描いた方が良いと思います。



井上清彦「秋のブーケガーデン」F4（水彩・色鉛筆）

作者コメント

昭和記念公園内にあるお花畑を描きました。秋の花々を思いきり描きました。奥行き感を出すために、上部に少し空をのぞかせました。開花が足りない分は想像で元気の良いお花を描き加えました。白い花もあったのですが、白い花の描き方が難しいので省略しました。出来上がってみると、花一辺倒で作品が単調になったので、得意のプルシャンブルーを使って遠くの林を描いてアクセントを付けました。

喜田コメント

井上さんの作品はどれも個性的で面白いと思います。今月の「お花畑」もまるで「モネ」のように魅力的です。沢山の花と随所に置かれた「プルシャンブルーの陰影」と「黄色の輝き」がいろいろな物語を思い出させてくれます。遠くの林も魔女の棲む森を感じさせてくれますし、上端に少しだけ覗く空も効果的です。お花畑の中に隠し絵のごとく、2人の人物を描いていますが、これも作品に溶け込んでいます。この人物の描きかたは決して技術的に上手とは言えませんが、無心に心の内をさらけ出して描いている純真さが素晴らしいのです。一人は両手を広げて、もう一人は大口をあけて歌っているのでしょうか、添景人物として最高です。理屈で描いた絵はすぐに飽きますが、この作品のように感性で描いた絵は何時間、観ていても飽きません。プレバトの先生なら「才能なし」というところですが、私は「才能あり」と言います。心のおもむくままに、気持ちの揺れ動くままに、感情の襞をさらけ出して純真に描けることは偉大な才能なのです。



喜田祐三「芸術公園の冬木立」 F20（油彩）

作者コメント

私の散歩道はだんだん増えて、今では 5 通りくらいあります。その一つが、往復で 6000 歩程の「府中芸術劇場公園」への道。枯木立の向こうに夕暮れが迫り、その中の小道を少年たちがかけっこをしています。林立する木立の手前の広場にはベンチが並んでいます。昼間は暖かい冬の日向を求めて、老夫婦や赤ちゃんを抱いた若い母親がベンチを独占しますが、日が沈む頃になると若いアベックの姿が増えます。実際に描いた葉書サイズの鉛筆スケッチを元にして、想像を働かせながら 20 号の油絵にしました。ベンチにかけ一組のアベックと自転車の男が立つ広場に枯木立の影が映っています。この部分に夕焼け色を置きたいと思いつつ、つい忘れていました。次回、修正してご覧いただきます。

（喜田祐三）



「スケッチ」 はがき大(色鉛筆)

以上